

ビギナーのための肝胆膵画像診断

—Q&Aアプローチ—

序 説

小林 聡*

今回の特集の企画をご依頼いただいた時、お引き受けするべきか少々躊躇した。それは、本誌において、「ビギナーのための～」と銘打たれたQ&Aスタイルの特集が、「気軽に読み始められ、かつ実践的な知識が容易に得られる」有用な企画として読者に親しまれてきたこと、そして、既に腹部領域では2021年に、倉敷中央病院の小山 貴先生により素晴らしい内容の増刊号『ビギナーのための腹部画像診断—Q&Aアプローチ—』が上梓されていたためである。

しかし、テーマが“腹部”から“肝胆膵”に絞られている分、トピックの深堀りや、最新の知見・疾患概念などを盛り込むことが可能となり、先行する増刊号と併用することで、ビギナーのみならず専門医の知識のブラッシュアップにも役立つ特集にできるのではないかと考え、本企画をお引き受けすることにした。

肝臓領域では、発生学や解剖に関連し、名前は知っているが理解が難しい“bare area”や“Arantius管”などを取り上げた。疾患各論では、門脈類洞血管疾患 (porto-sinusoidal vascular disease : PSVD) や irAE 関連肝胆道病変といった最新の疾患概念や、分類が複雑でなかなか覚えるのが難しい肝細胞腺腫の最新の亜分類について取り上げた。胆嚢・胆道領域では、解剖関連項目としてウインスロー孔やCalot三角について、疾患各論としては稀ではあるが、重要な黄色肉芽腫

性胆嚢炎や胆嚢捻転などを取り上げた。膵臓領域の解剖では膵管癒合不全や輪状膵を取り上げ、疾患各論では、膵炎や膵腫瘍に関する様々な分類を網羅的に復習できる構成を目指した。

私自身の専門が肝臓領域であるため、誌面の半分以上を肝臓に割いてしまったこと、中には少し難易度の高いトピックが混じってしまったことに関しては、私のこだわりとしてご容赦いただきたい。その一方で、胆嚢・胆道、膵臓に関しては項目数を絞った分、厳選された構成になっているのではないかと自負している。

執筆は、第一線で活躍されている中堅およびベテランの先生方を中心をお願いした。肝胆膵画像診断のオールスターキャストともいえるべき錚々たる先生方に、ご多忙の中、大変充実した内容の原稿をご執筆いただけたことは幸甚の至りである。

多忙な放射線診断医が、重厚な論文をじっくり読み込む時間を確保するのは容易ではない。しかし、1項目ずつ完結するこのQ&Aスタイルならば、隙間時間を利用して着実に知識のブラッシュアップを図ることができるのではないかと。本特集を2021年の増刊号 (Vol.41 No.4) と併せてご利用いただくことが、肝胆膵画像診断の知識の充実の一助となれば幸いである。初学者のステップアップとして、また、エキスパートの先生方の知識の再整理として、広く活用されることを期待している。

*金沢大学医薬保健研究域医学系放射線科学講座
Satoshi Kobayashi Department of Radiology, Kanazawa University Graduate School of Medical Sciences